

第6回 吉永小百合に對抗できる デュエット女性歌手

昭和37年のレコード大賞にも輝いた大ヒット曲、橋幸夫と吉永小百合の『いつでも夢を』は、その後、各レコード会社の青春スターコンビによるデュエットソングを誕生させていく契機となります。

『いつでも夢を』でビクターに遅れをとったコロムビアは、『いつでも夢を』発売の1年後、ふたりの切り札による名曲を世に送り出します。島倉千代子と守屋浩が歌う『星空に両手を』です。

昭和30年代前半に『東京だヨおっ母さん』『からたち日記』などのヒットを出した島倉は、昭和37年10月に阪神タイガースのスラッガー、藤本勝巳との婚約を発表しますが、その後、鬨りが生じつつあった人気の救世主となったのが、昭和38年9月に発売されたこの曲でした。

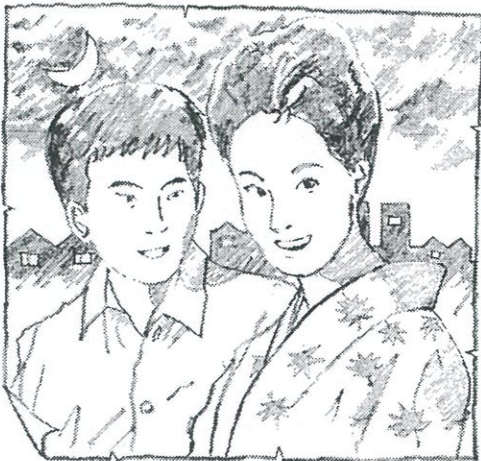
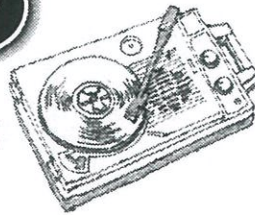
『星空に両手を』は、それまでの島倉カラーとはいくつもの点で異なっていました。作詞の西沢爽は、嫁いでいく「島倉の幸せ」を多くの若者ファンに還元するような歌詞を提

供して、ファンと共に歌えるような島倉版青春歌謡を誕生させます。もしかしたら、西沢は、坂本九の

名曲カルテ

昭和歌謡と いままで

堀井六郎
絵・松本浦



『上を向いて歩こう』や当時すでに知られていた『見上げてごらん夜の星を』（オリジナルは昭和35年初演の同名ミュージカルで、伊藤素道とリリオ・リズム・エアーズが歌唱）あたりを参考にしなが、若者への力づけを歌詞に込めていたのかもしれない。

宝石なんてなくても
心は夢のエメラルド
星空に両手を上げて
この指を星で飾ろうよ

都会の星は指を飾れるほどの数があるわけでもないし、輝いてもいなければ、なんてロマンチックな歌謡曲なんだろうと、今さらながらに

思います。エメラルドを知らなかった私に、その意味を教えてください。でもあり、その5年後には、テンプターズがこの宝石の色を教えてくださいました。

メロディーも当時、映画やテレビドラマの音楽担当でひっぱりだこだった神津善行を登用して、島倉カラーを広げ、より鮮やかに輝かせることに成功しています。ちょうど、神津作曲の『新妻に捧げる歌』（原題『幸せを求めて』）が江利チエミの歌で知られていた頃でもあり、島倉の心境を意識した、なかなか粋な作曲家指名だったと思います。

そうした布石の上に、『僕は泣いちゅち』『夜空の笛』以来、『有難や節』『大学かぞえうた』などのヒット曲が続ぎ、当時人気絶頂にあった守屋のボーカルが加わったわけで、ファン層の拡大にもつながり、『星空に両手を』は70万枚の大ヒットとなりました。

お千代さんが亡くなってから11月8日で早や4年の月日が経ちますが、品川区にある私の事務所からほど近いところにある、お千代さんが通った音楽学校や錦を飾った歌謡ショーの公会堂跡地から、今でも生の歌声が聞こえてくるようです。